慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成28年度 三四会全国支部長会開催

平成28年度三四会全国支部長会が、9月24日（土）18時よりホテルオークラで行われた。

司会は堀内行雄理事で、開会の辞の中で武田純三会長は、支部どうしの連携を強め、三四会としてのプレゼンスを高めることの重要性を強調された。次に、戸山芳昭常任理事は、新病院棟建設事業の進捗状況とともに、慶應義塾が進める殿町タウンキャンパスの紹介も交えて、三四会が一体となった協力を呼びかけた。支部長代表挨拶では、山形県の武田和夫支部長が、支部における募金活動と慶應義塾の奨学金への支援活動の経験を紹介された。

続いて岡野栄之医学部長は、医学部創立100年事業の準備状況を中心に、世界に通用する人材育成をめざす医学部教育の現況について述べられた。竹内勤病院長は、2016年3月に得られた臨床研究中核病院の承認、来年に予定される病院機能評価の審査など、慶應義塾大学病院を取り巻く近況について報告された。

次に三四会役員から、まず渡辺真純副会長が新病院棟の建設計画について、写真や間取り図を用いて詳細に説明した。末岡浩理事は、三四会員からの募金の現状について報告した。質疑応答では、慶應医学のめざすべき将来について有意義な意見交換が行われた後に、リー啓子副会長の閉会の辞で締めくくられた。

引き続き19時30分より懇親会が開催された。横浜支部長の八十島唯一支部長は、乾杯の挨拶の中で、強化されつつある横浜三田会との連携について触れられた。近藤太郎理事は、地域医師会の役員として活躍中の三四会員の連携を強めることを提案した。福島裕之理事は、連合三田会2016（10月16日開催）での三四会企画の講演会などを紹介し、多数の会員の参加を呼びかけた。

各支部の代表から近況が報告され、鈴木悠史評議員（形93回）の指揮で肩を組みながら「若き血」を斉唱した後、古梶清和副会長の閉会の辞で名残を惜しみつつ散会となった。懇親会の司会を務めた私にも、支部を通じた三四会の固い結束が感じられた夜となった。

（山上　淳　77回）

会場の様子

横浜支部長の八十島唯一君

東京・日本橋にライフサイエンス産業拠点を設立
LINK―J初代理事長に就任

医学部長　岡野　栄之（62回）

6月3日、東京・日本橋にて、一般社団法人「ライフサイエンス・イノベーション・ネットワーク・ジャパン（以下、LINK―J）」の設立記者会見が開催された。会見には三井不動産・代表取締役社長の菰田正信氏をはじめ、筆者を含む担当者を設置。来年度には、産・学・医療の新たな連携拠点となる研究棟「JSR・慶應義塾大学医学化学イノベーションセンター」（信濃町キャンパス）が竣工する。

ライフサイエンスとはあらゆる学問の複合領域であり、一人の力で解決できることは限られている。筆者もまた、自身の研究活動を通じて「学際的研究者の不足」などの課題を痛感してきた。

LINK―Jには、法律家、投資ファンド、アクセラレーターなど異業種のプロたちが「サポーター」として参画している。現在直面している様々な課題も、彼らの知識や経験があれば、解決に導くことができるだろう。

LINK―Jから新たなライフサイエンスが誕生し、それが世界の人々の健康に寄与できるように、理事長の責務を全うしていきたいと思う。

6月3日記者会見での様子（写真左から三井不動産・菰田代表取締役社長、岡野、三井不動産　植田常務執行役員）

本計画の主要メンバーが出席。記者陣からは活発な質問があがり、本計画に対する関心の高さが伺われた。

日本橋にライフサイエンス産業の一大拠点を構築するこの計画は、三井不動産が推進する再開発プロジェクト「日本橋再生計画」に端を発する。

計画では、江戸時代より「くすりのまち」として知られる日本橋に、ライフサイエンス産業にかかわる人と情報が行き交う新たな拠点を設立。その上で、イベントの開催などを通じて、彼らの交流の「機会」を提供する組織として、新たにLINK―Jが設立された。

すでに日本橋の拠点ビル内には、会員同士が歓談できる交流ラウンジや会議室を用意。各種セミナーも開催している。起業志望者には、支援プログラムなども提供する。

筆者は、LINK―Jの初代理事長を務める。副理事長には、澤芳樹先生（大阪大学大学院医学系研究科長・医学部長）をお迎えした。さらに、運営諮問委員として、松本洋一郎先生（理化学研究所理事）、山中伸弥先生（京都大学iPS細胞研究所所長）ら錚々たる顔ぶれにご参画頂いた。

現在、再生医療などの先端医療を中心に、産学連携による実用化の動きが急速に進んでいる。

慶應義塾大学医学部でも、福澤諭吉先生の「実学の精神」を重んじ、将来の臨床応用を見据えた産学連携を推し進めてきた。2014年度には知的財産・産学連携の専任

生涯教育研修夏季特別セミナー開催
「眼疾患治療アップデート：失明しない、快適に見るサイエンス!!」

平成28年8月27日（土）ホテル椿山荘東京にて、慶應義塾大学医学部生涯教育研修夏季特別セミナーが開催された。8月の夏休み時期の開催は初とのことであったが、当日は雨天にもかかわらず多くの先生方にご参加いただいた。

高齢社会となり、感覚器の健康が非常に重要な課題となってきた。中でも視覚情報は外界からの情報の8割以上を占めるといわれ、眼の健康は命の次に重要ということができる。そこで今回のセミナーでは、「眼疾患治療アップデート：失明しない、快適に見るサイエンス!!」と題し、各専門領域の第一人者であられる三人の先生方と筆者で四つのテーマで講演を行った。

まず始めに、相原一教授（東大）に、現在、中途失明の第一位となっている緑内障について、その病態と診断、治療についての最新の知見を解説いただいた。緑内障は視神経が侵される慢性の進行性疾患であるが、その複雑な病態を簡潔にわかりやすく説明された後、本邦では眼圧が高くない正常眼圧緑内障の多いこと、症状がないために発見が遅れやすいこと、現在は非常に多くの薬剤が開発されていること、しかしながら患者自身の点眼による治療の継続が難しいことなど、緑内障治療の進歩と課題などが示された。

次に、野田航介准教授（北大）より、糖尿病網膜症治療の現状と今後について解説いただいた。糖尿病網膜症は緑内障と並んで失明につながる疾患であるが、その患者数は世界で四億人ともいわれ、先進国の都市部で上昇しており、二千四十年には六億四千二百万人に上るであろうと予測されている。野田准教授は、現在の非常に進歩した検査技術と治療について、早期発見により失明を予防できる疾患として症例を交えながら紹介された。マネージメントの進歩を改めて感じさせられた。

続いて、山田昌和教授（杏林大）より、急増するドライアイとその対策について講演いただいた。視覚情報社会、コンタクトレンズユーザーの増加、エアコンの普及によりドライアイ患者が急増している。その病態をわかりやすく解説いただき、涙に着目した眼表面を層別に治療する日本発の最新の治療について概説いただいた。ドライアイは筆者も専門としているが、近年、自覚症状と神経との関わりも研究されてきており、山田教授の話からも病態の捉え方および将来的な治療の可能性の広がりが伺えた。

最後に筆者が、目の老化とアンチエイジング医学についてお話しさせていただいた。近年、抗加齢医学研究は急速に進み注目されている分野であるが、その中で、自分が興味を持っている「ごきげん」と健康の関連、そして昨今大きな話題となり慶應でも臨床研究がスタートした老化制御因子NMN（Nicotinamide Adenine Dinucleotide）についてなど、最近のトピックをいくつか紹介した。

情報交換会では、今回、眼科で注目されている「目に良い食べ物」を紹介し、三四会顧問の菅沼安嬉子先生がそのエビデンスをもとにアレンジされた料理を囲んで、ご参加の先生方もおいに話が弾んでいた様子であった。

（坪田一男　眼59回）

会場の様子。山田昌和教授（左）と筆者（右）

相原　一教授

野田　航介准教授

山田　昌和教授

リオオリンピック本部ドクター帯同記
スポーツ医学研究センター　真鍋　知宏（75回）

私はリオデジャネイロオリンピックに日本オリンピック委員会（JOC）本部ドクターとして帯同しました。オリンピック競技大会におけるJOC本部ドクターとしての三四会員の帯同は、当センターの大西祥平元所長（56回）と石田浩之准教授（66回）が務められていますが、いずれも冬季大会でした。夏季大会にJOC本部ドクターとして帯同する三四会員は私が最初となりました。循環器内科医として臨床に従事しながら、10年以上前からスポーツドクターとしての活動を本格的に開始し、国立スポーツ科学センターなどで数多くのトップアスリートの健康管理業務にも従事してきました。また、これまでに2回の冬季ユニバーシアード大会、1回の冬季アジア大会、さらに1回の夏季アジア大会にJOC本部ドクターとして帯同した経験を踏まえて選ばれたものと考えています。

JOC本部ドクターの仕事は渡航前の選手の健康診断、監督・コーチの体調把握、事前の感染症対策から、現地での選手・役員の体調管理、ドーピング検査への対応、各国メディカルスタッフとの交流と多岐に渡ります。特に今回はジカウイルス感染症対策について、各競技団体に何度も最新情報を提供しました。また、各競技団体に応じた予防接種の相談を受け、接種も実施しました。報道の通り、当初はさまざまな問題が生じた選手村内ですが、日本の宿泊棟内に日本選手団専用の医務室を開設し、選手や役員の診療にあたりました。また、さまざまな競技会場にも足を運び、競技中は応援に専念しながらも、競技前後には本部ドクターとしての業務を行いました。男子サッカーはリオから飛行機で4時間離れたアマゾンの都市マナウスで行われましたが、私は本部役員とともに1泊2日の旅程で応援に行きました。これも私が事前に黄熱ワクチンの接種を受けていたために選ばれたものでした。また、過去3大会連続して世界陸上に帯同している陸上競技に対しても十分なサポートを行うことが出来ました。もちろんリレーの銀メダル獲得の現場にも、銅メダルの行方に心配させられた競歩の現場にも立ち会うことが出来ました。

私は2020年東京オリンピック・パラリンピック組織委員会内に設置されたアスリート向け医療サービスに関するワーキンググループ委員として、2015年末から議論に参加しております。

これまでは、ロンドン大会でのデータを基にした議論が中心でしたが、今回視察したリオ選手村のポリクリニック（診療所）の状況を踏まえて、2020年のポリクリニックの設備や選手村外の病院との連携を議論することになります。出来るだけ多くの三四会員が関わることが出来るように、微力ながら努めて参りたいと思います。

最後になりましたが、約1ヶ月という長期間にもかかわらず、リオ行きをお許し下さいました戸山常任理事（54回）、勝川教授（64回）をはじめ、当センターの教職員の皆様に御礼申し上げます。また、スポーツドクターとして常日頃からご指導下さいます日本陸連の山澤文裕理事・医事委員長（60回）にも感謝致します。

選手村内にて

選手村内のポリクリニック視察後の日本選手団メディカルスタッフ

4×100mリレーで銀メダルを獲得した第1走者の山縣亮太選手（2015年本塾総合政策学部卒、掲載許諾済）

慶應医学賞
The 21st Keio Medical Science Prize
2016年12月1日（木）
第21回 慶應医学賞受賞者
●授賞研究テーマ
人類進化の分子遺伝学への貢献
Svante Pääbo
スヴァンテ ペーボ
マックス・プランク進化人類学研究所（ドイツ）教授
●授賞研究テーマ
PD-1分子の同定とPD-1阻害がん免疫療法原理の確立
本庶　佑
ほんじょ たすく
京都大学大学院医学研究科 名誉教授
授賞式・受賞記念講演会
慶應義塾大学 信濃町キャンパス北里講堂
（北里記念医学図書館2階）
午後2：00～5：30（受付開始：午後1時30分）
住所：〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地
交通：JR総武線・信濃町駅下車徒歩2分（都営地下鉄大江戸線・国立競技場駅下車徒歩5分（A1出口））
慶應義塾医学振興基金事務室
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地　慶應義塾大学信濃町キャンパス内
TEL 03-5363-3609　FAX 03-5363-3215
E-mail k-msf@adst.keio.ac.jp　WEB http://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/index-j.html

慶應義塾大学医学部開設100年記念式典・祝賀会、シンポジウムのお知らせ

慶應義塾大学医学部は1917年（大正６年）に私学で最初の大学医学部として発足し、2017年（平成29年）に開設100年を迎えます。そこで下記のように医学部開設100年記念式典・祝賀会、シンポジウムが開催されることとなりました。

（ご参加申込方法につきましては次回以降にご連絡させていただきます。）

記

開催日時：2017年５月13日（土）
13:00～16:00　シンポジウム
17:00～18:00　式典
18:30～20:30　祝賀会

開催場所：ホテルニューオータニ「芙蓉」「鶴」
東京都千代田区紀尾井町４-１

以上

鑑識知来

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが終了し、いよいよ東京の番である。リオでは、私がよく知る義塾体育会競走部出身のアスリートが4×100mリレーで見事に銀メダルを獲得してくれた。彼は何度かスポーツ障害を経験し、それを克服しての栄冠であるだけに尚更大きな感激だった。われわれスポーツドクターが仕事冥利につきるのはこんな瞬間であろう。ただ、私は起きてしまった障害を治療することも重要であるがより大事なことは、障害を予防することではないかと常々思っている。

私はスウェーデンのカロリンスカ研究所留学以来、歩行を中心とした動作解析研究を行ってきた。現在とくにランニング障害の真の原因を探り、その予防策を構築していこうと考えている。それには異なる学部間の協力、あるいは企業との産学共同研究が必要と考えた。

私は日吉キャンパスにある研究所に勤務しているが、幸い、隣の理工学部、矢上キャンパスまで歩いて5分である。ある日、縁あって機械工学科の荻原教授のところへぶらりと伺ったところが、ヒトとサルの歩行の話で盛り上がり、ぜひ共同で勉強会をしましょうとなった。つい先日も行われた日吉歩行研究会である。毎回、医学部の頭では思いつかない側面を指摘していただき、非常な知的刺激になっている。参加している大学院生も勉強になっているようである。

企業との共同研究ではジェイアイエヌ社とJINS MEMEというメガネ型のウェラブルセンサーを開発した。メガネをかけるだけでアスリートの動作解析が簡単に行えてかつリアルタイムフィードバックも可能である。障害を招く動作を回避してスポーツ障害予防につなげていければと考えている。

総合大学であることの利点が日吉にいると肌で感じられ、そのことに感謝しつつスポーツ立国へ少しでも貢献できればと考えている。

（スポーツ医学研究センター　橋本健史　63回）